2022年2月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第541号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

「ブックインとっとり　地方出版文化賞特別賞」授賞――◇◆◇

琉球・沖縄文学の花綵―『ことば咲いわたり』を編んで―

文・波照間 永吉

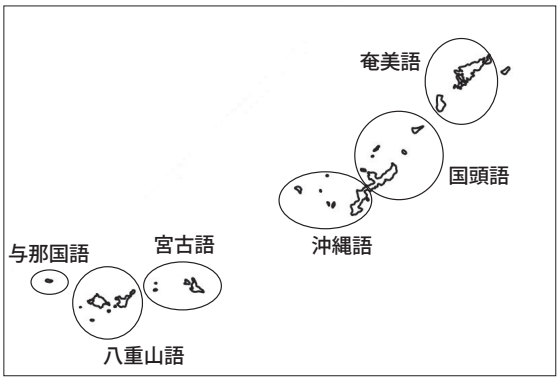
グスーヨー　チューウガナビラ。ワンヤ　ナマ　グソークァイ　ウガナビタル　ハテルマエイキチンディ　イル　ムヌ　ヤイビーン　ユタサルグトゥ　ウニゲーサビラ。冒頭、沖縄の首里方面の言葉でのご挨拶でした。皆様、こんにちは。只今ご紹介いただきました波照間永吉と申します。お見知りおき下さい、という意味の言葉です。皆様には、ほとんどお分かりいただけなかったことと、思います。これほど言葉の違う地域が、琉球・沖縄というところだとお感じいただきたかったものですから、失礼かとは思いましたがお話しさせていただきました。

【沖縄　ことば咲い渡り　さくら／あお／みどり】外間守善・仲程昌徳・波照間永吉著／ボーダーインク刊・四六変型判・定価各2,200円＋税／さくら＝ISBN978-4-89982-383-4、あお＝ISBN978-4-89982-384-1、みどり＝ISBN978-4-89982-385-8

さて、この度は、思いも掛けず、34回の歴史を刻む「ブックインとっとり2021　地方出版功労賞・特別賞」の栄誉を賜り、まことに有り難うございました。私共のこのようなささやかな試み、しかも、30年前の仕事に対し、お目を向けられ、評価いただいたことに対し、審査員の先生方、関係者の皆様、そして鳥取県の皆様に対しまして、編著者を代表いたしまして深く感謝申し上げます。

さて、先程の言葉の話ですが、この言葉だけが琉球語かというとそうではありません。私は、首里・那覇のある沖縄島からさらに南西方向400㎞のところにある石垣島で生まれ、育ちました。そこの言葉は先程の言葉とは全然違います。私の島の言葉では、同じ内容が、ケーランネーラー　クヨーマナーラ。バナー　ナマ　ショウクァイ　タボラレーダ　波照間永吉ユー　ドーディン　ミーッシ　タボーンナーラ、となります。このように、両者はお互いに通じないほど離れています。そのような言葉の群れが、奄美から国頭・沖縄・宮古・八重山・与那国と6つの大きな群れに分かれ、この地域にある800ほどの集落でそれぞれことなったことばを使用してきた歴史があるわけです。これらの言語を総称して琉球語、あるいは琉球諸語、と称しています。ただ、このような豊かな言語の違いをしめす琉球語は、現在、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の方で「消滅の危機に瀕した言語」とされ、私の島の八重山語は、その上に「重大な」という語の付いた、極めて危機に瀕した言語とされています。

さて、このような「危機言語」のお話しを申し上げましたのは、今回賞を賜りました『ことばさいわたり』に収録した詩歌は、4分の3がこの琉球語の作品でした。残りの4分の1は近代以降に成立した日本語による短歌・俳句などの作品でした。この琉球語の作品を琉球文学と称しておりますが、これを中心に琉球・沖縄の歴史の中で、私たちの祖先達がどのような言語による文芸作品を生み出し、享受してきたかを見ようとしたのが、この本です。この本の構想は本書の「あとがき」にも書きましたように、外間守善先生の発案になるものです。「ことば・咲い渡り」は



『沖縄タイムス』で1991年1月1日から連載が始まり、1994年4月17日に連載を終えました。外間守善先生の“あけもどろの花”のオモロからでした。当時は『朝日新聞』で大岡信氏の「折々の歌」が大きな反響を集めている頃でした。琉球文学と沖縄近代文学の詩の華を集めて、その底に流れる沖縄人の心ねを尋ねてみようという企画でした。そのことを外間先生は1990年12月30日朝刊に「ウチナーンチュの心が、ウタの中にどのように託され、表現されたか、文学という世界から覗いて」、「ウチナーンチュの心を沖縄のことばに探る」と述べております。

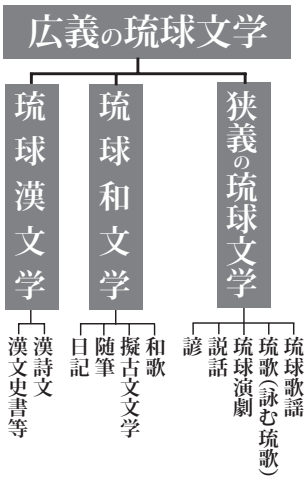
さて、その琉球文学ですが、この分類については「広義の琉球文学」（琉球漢文学・琉球和文学も含む）と「狭義の琉球文学」があります。「狭義の琉球文学」は琉球語によって形作られた文学作品を言っています。その部分の話です。歌謡や説話、演劇作品などが主ですが、小説や随筆などはありません。その文学の時間的な範囲は、琉球語の文学が確認されるところから、公用語が日本的標準語に変わって、琉球語による文学作品の創作が下火になる19世紀末ころまでとするのが、外間先生の説ですが、現在も琉歌は作られていますし、新しい民謡が生まれ続けています。また、芥川賞や、川端康成賞など、日本の文学賞を多く受けられた大城立裕さんが新作組踊を作られるなど、現在も命脈は保たれています。もっとも、それでも20世紀以前の姿とは比べようもありません。これを思うと、琉球文学の時代は、琉球史が活発に動き出す13世紀頃から始まり20世紀に入る頃までをその主要な時代とすることができると思います。20世紀以降は日本語による短歌・俳句・小説作品が沖縄で、そして日本各地に出て行った人たちによって作られるようになります。この20世紀初頭の沖縄出身作家達が経験した日本語表現と琉球語表現の入り組み・葛藤は、現在までも続いています。テーマの独自性、そしてこの言語的な試みの多様性などから、19世紀末から20世紀以降の日本語文学を「沖縄文学」と称しています。

琉球文学の文献として最も古いのが『おもろさうし』です。全22巻の書物です。1554首の、オモロという神祀りの時に謡われた歌謡です。よく「沖縄の万葉集だ」といわれますが、これは必ずしも正確な比喩とはいえません。万葉集の歌が、相聞を基本とする抒情歌であるのに対し、オモロは、５７５７７などの音数律ももたず、それよりもずっと長い歌です。例えば、私たちの本のタイトルは「ことばさいわたり」でしたが、これは『おもろさうし』の第7巻－379番のオモロ

一　天にとよむ　大ぬし　　1、天に鳴り轟く大主様
　　あけもどろの　はなの　　明けもどろの花が
　　さいわたり　　咲い渡り
　　あれよ　みれよ　きょらやよ　　あれよ、見れよ、神々しさよ
又　ぢ天とよむ　大ぬし　　2、地天に鳴り轟く大主様

からとったものです――共編者の仲程昌徳先生の提案によるもので、いかにもこの企画に相応しいものとなったと思います。

このオモロは日の出の光景を歌ったオモロとして有名ですが、外間先生はこれを私たちの本の巻頭にとりあげ、次のように解説いたしました。「太陽よ、明けもどろの花が咲き渡っていく。あれ見ろ、美しいことよ。光が飛び散り炎が揺れて現れてくる太陽に、天地をどよもすような底鳴りの音が響きあっている。日の出の美観を讃えたオモロ。壮大な美しさに思わず、『アリ　ンーレー　チュラサヌ』と叫ぶオモロ人の心にはすでに叙情がある。太陽も『明けもどろの花』（中略）に譬（たと）えられている。新しい型の𪜈とおもろ」としています。（先生はこのオモロに「叙情がある」とおっしゃっていますが、これは叙情というよりも集団の宗教的感情と言うべきものではないかと思います）。



オモロの例をもう一つご紹介したいと思います。これも本書に取り上げられていますが、『おもろさうし』巻10－534

一　𪜈け、あがる三日月や　　1、あれ！　上がる三日月は
　　𪜈け、かみぎやかなまゆみ　　ああ、神の金真弓よ
又　𪜈け、あがるあかぼしや　　2、あれ！　上がる赤星は
又　𪜈け、かみがかなまゝき　　ああ、神の金細矢よ
又　𪜈け、あがるぼれぼしや　　3、あれ！　上がる群れ星は
又　𪜈け、かみがさし奇せ　　ああ、神の御髪の奇せ差羽よ
又　𪜈け、あがるのぢぐもは　　4、あれ！　上がる虹雲は
又　𪜈け、かみがまなきゝおび　　ああ、髪のご愛用の御帯よ

夕闇の迫りつつある夕方の西の空か、明け方の東の空か、議論は分かれますが、天空に現れる月、星、雲をとらえて、これを弓と矢を手にした神の姿にみなしています。その構想は実に雄大です。しかし、このオモロの素晴らしさは、構想の雄大さのみにあるのではありません。その雄大さとともに、天空に輝く月や星に、武装する神の荘厳な姿をみた無垢なままの人間の、素直な感動と畏敬の念の表現、にあると思うのです。それ故にこのオモロは単調な表現ながらも、各句に「𪜈け」という賛嘆の意を表す感動詞を冒頭において、力を持って迫ってくるように思われるのです。オモロが単なる叙景の歌でない所以です。

この二つのオモロを共に叙景歌として捉えることが出来ないと言うことは、比嘉実氏なども夙に指摘していたことです。この考えは、『万葉私記』などで西郷信綱さんが示した幾つかの歌の解釈などによって導き出された見解ではありますが、後者のオモロで、天体に神の姿を見いだすオモロ人の眼は、まさに自らを守り育む神に対する信仰ある者の眼であり、それによってこそ天体は神の姿として彩られていると言ってよいのではないでしょうか。このオモロ

を謡った者の眼が、同じく日の出の光景を見て謡ったのが前者のオモロだと思うのです。このようにオモロは、現代のわれわれれとは別の眼をもった者たちの見た情景を表現しており、オモロを読み解くためには、そのような、宗教的な想念に思いを致すことが必要だろうと思うわけです。

オモロは、定まった音数律をもたず、対句表現をベースにした長い歌だったのでした。これが、12、3世紀頃から沖縄各地で謡われていたとされていて、これを首里王府が採録し、冊子の形にまとめた物が『おもろさうし』であったのです。もっとも、全22巻が1531年に出来上がったわけではありません。第2巻はそれから約80年後の1613年、第3巻以降はさらに10年後の1623年に出来上がりました。『おもろさうし』の多くの歌が首里王府の祭祀で、国王を守護する、国王の姉妹の神様――これをヲナリ神と申します。日本で言えば、スサノオとアマテラス大神のような関係にある神です――が、国王の統治・王権の永遠を祝福する歌として謡われました。また、沖縄、奄美の島々・村々の神祭りなどで謡われた歌も収録されました。最後の22巻は女性の宗教世界に於ける地位の下落によって、男性役人が進出して、男性歌唱者による儀礼歌謡となって王府の公式祭儀で謡われたものだけを集めています。

オモロが、古琉球の人々の精神世界、そして当時の社会・言語などが描かれた文学作品であることは確かなことで、これが、文字によって書き留められた事が琉球文化史としては重要なことです。と申しますのも、実は琉球文学の大多数が口頭伝承の世界で生まれ、享受されてきたものだからです。細かなことを申す暇はありませんが、琉球・沖縄の文化はこれを史的にみると、日本本土より800年から1000年ほど遅れて歩んできたとされます。仏教の伝来・文字の使用、国家の成立など、いずれもそうだと言われています。ですから、庶民階層の人々の文学は、基本的にみな口承文芸として存在してきたのです。琉球文学を特徴づける歌謡文学――これには先程のオモロのような神祭りの時の歌、祭祀歌謡とよんでいますが、これが膨大な数存在し、かつ、現在も各地の祭りの中で、生きて機能しているところが大切なことです。しかもこの祭祀歌謡というのは、歌い手、その時・場所が厳密に規定されており、また、所作を伴うなど、日本の古代文学研究者にとっては、参照すべきことの多いジャンルです。また、宮古や八重山などの南琉球では、この対語対句を重ねて物語を叙事的に歌い継いでいく歌謡が発展しました。宮古では1500年と1524年のオヤケアカハチの乱・鬼虎の乱を討伐するために、首里王府軍と一緒になって戦争に参加した、宮古島の英雄達の戦闘が50数番の叙事歌として謡われています。これがなんと現在まで伝えられているのです。また、首里王府の政策で未開の地に強制的に移住させられ、新しい村を開いた村の歴史を謡う歌もあります。さらには、その強制移住のために仲を引き裂かれた男女の悲恋を物語る歌もあります。皆様が沖縄の民謡というとすぐに思い浮かべられるだろう「安里屋ユンタ」なども、単なる恋の歌ではありません。元々は、竹富島に赴任した村役人が、自分の身の回りの世話をする村娘を捜して、最初の美人には「お役人と一緒になっても後々のためにはなりません。島の青年と結ばれてこそ、将来は幸せになるのです」と断られ、それではと、別の娘を探して、自分の宿に連れ込んで、男の子・女の子を産ませ、その子達が出世するようにと願った」という、琉球国時代に於ける役人の村人に対する横暴を批判するかのように謡った歌でした。そのような、ジャンルの歌謡は日本文学の作品としては、古事記・日本書紀の歌謡などにわずかに例がみられるだけで、琉球文学の大きな特徴をなすものと思います。そして、庶民の喜怒哀楽を歌った叙情歌謡として、沖縄・奄美の北琉球で、はじめて、音数律を持った歌が登場します。これが、８８８６の４句からなる琉歌と呼ばれるものです。琉歌の成立が何時なのかは、和歌の始まりが分からないように、分かっておりません。しかし、和歌のように万葉以前の4、5、6世紀などではないことはいうまでもありません。現在の説では、サンシン（三味線）が伝来した14世紀以降のことではないかとされています。ここにも1000年ほどの時間差があります。ともあれ、この琉歌の発生によって、庶民から国王までの全ての人々が、自分の気持ちを短い形式で表白することができるようになりました。その歌数がどれほどのものかというと、琉球国時代から明治の初期に限定すると、約3000首ほどが記録に留められていました。明治以降は、沖縄の各地に、琉歌の創作を愉しむ琉歌会ができ、記録される歌数も増えていきました。21世紀の現在も多くの人々によって詠まれています。この北琉球の琉歌に対して、南琉球では、音数律の形成には至っておりませんが、短詞形の抒情歌謡がありました。宮古ではトーガニー、八重山ではトゥバルマー、あるいはトゥバラーマと呼ばれる歌謡です。また、シュンカニという琉歌形式の影響のもとに成立したものもあります。これらの特徴は、いずれも一定の旋律にのせて謡われる歌詞として存在しています。文学の中の詠み歌としてではなく、歌謡となって謡われているということが特徴です。

ここでトーガニーとトゥバラーマから一首ずつご紹介しましょう。

宮古のトーガニー

・っヴァとぅ　ばぬとぅが　　貴方と私の
　ばしがまからやよー　　間からは
　にしゃやとぅ　ばんとぅが　　愛しい貴方と私の
　ばしがまからやよー　　間からはよ
　みジやとぅんどぅ　　水でさえも
　むりんがしゃく　だチどぅ　　漏れないほどに抱き合っていて

八重山のトゥバラーマ

・うらとぅ ばんとぅぬ ふた仲からや　　貴方と私の二人の間からは
　ふきる　かぜーまんざん　ねぬでどぅ　　漏れ行く風さえも無いと
　ばな　うもうだ　　私は思っていたのに……

両方とも恋の歌ですが、宮古の方は、恋する男女が、私たち二人は水をも漏らさないほどに抱き合っていよう、というものです。一方、八重山の方は、恋は破綻していますが、その以前は、私たち二人の間からはそよと吹く小さな風さえも吹き通ることは無いと思っていた、というもので

す。私などからすると、宮古の歌は、二人の肉体が密着しているような、いわば肉感的な感じがします。一方、八重山は二人の接触がわずかの隙間も見せないということよりも、むしろ、心の状態を言っているように思われます。前者を日本語表現すれば「水も漏らさぬ仲」であり、後者は「すきま風が吹く」です。この二つの歌の間に、宮古と八重山の地域性、別の言葉で言えば、島民性のようなものがあるのか、ないのか。このような微妙な問題なども考えさせてくれるのが、琉球歌謡の面白さだと思います。そして、これらの文学テキストが歌謡のもう一つの要素である旋律・曲と一緒になって、声に出して歌われるとき、これらの歌謡は、しみじみと私たちの心に染みこんでいるものになってくる、と思います。

ここまで、琉球文学の中核をなす、歌謡についてお話ししてきました。これらの文学の伝統とは異なって、1879年、明治12年のことですが、「琉球処分」によって沖縄県が設置されると、若者達は日本語の表現世界を求めて活発に活動します。与謝野鉄幹・晶子の門を叩き『明星』に作品を発表した山城正忠、末吉安持（詩華）、これに対する『スバル』によった摩文仁朝信、俳句の末吉安恭（麦門冬）――この人は南方熊楠とも書簡でやりとりし、「琉球の小南方」と呼ばれた――などが活躍します。このような、東京を中心とする日本の近代詩歌の世界で活躍する人々が出てきているのです。一方、地元の『琉球新報』『沖縄毎日新聞』では歌壇欄や文芸欄を設けて、日本の一部となった沖縄での、日本文学の活動を促します。私などが驚くことは、1879年の国家の崩壊から僅かの間に、青年達がいちはやく日本の文芸の世界に身を投じていることです。母なる言語である琉球語ではなく、新しく学習して身につけた言語である日本語を自由に操って、自己表現に向かうことが澎湃としておこっているのです。このような新しい日本語による文学もまた、起こっていたのでした。

この琉球文学と沖縄における日本語文学の全体の中から、心にとまる詩句の一節を抜いて、沖縄の人々に琉球文学と沖縄文学の素晴らしさ、そして、そこに流れている古琉球・近世琉球、そして近代に漕ぎ出た私たちの祖先達の精神世界を垣間見ようとしたのが、この本でした。琉球文学の中からオモロと琉歌を外間先生が、近代詩歌を仲程先生が、そして琉球歌謡を私が、という分担で連載が始まりました。連載の表題は、先程ご紹介しましたオモロの一句「さいわたり」からとって「ことばさいわたり」としました。

外間先生はじめ私たちの意図が、読者の皆様にどれだけうまく伝わったかは分かりませんが、当初、一年であった連載の予定が3年余にも延びたことは、私たちの意図の幾分かは評価してもらえた、と受け止めたいと思います。

冒頭に述べましたように、琉球語はその維持・継承に赤ランプがともっています。その様な中にあって、琉球語と私たちの先人達がどのような精神的営みを展開してきたかにふれるためにも役立つものではないかと、振り返って思います。そのような、言語の危機的状況のなかで、その維持・継承に役に立つかも知れない、本書を「ブックインとっとり　地方出版文化賞特別賞」に選んでくださったことは、琉球・沖縄文化のためにも大きな励ましになるものと感謝しております。雑駁なお話しで、申し訳ございませんでしたが、これで私の講演とさせていただきます。有り難うございました。ニフェーデービタン。タンディガータンディ。ニファイユー、フガラッサ。沖縄語・宮古語・八重山語・与那国語で、有り難うございました。

＊

波照間永吉（はてるま　えいきち）　1950年石垣市生まれ。『おもろさうし』『琉球国由来記』など琉球文学・民俗文化の研究。現在、名桜大学大学院教授。

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『白川　千人の石合戦 －大干ばつが招いた水争い』●荒牧邦三著

白川は阿蘇根子岳を源として、南郷谷を流下し、同じく北の谷を流れる黒川と立野で合流後、右岸側に迫玉岡堰、津久礼堰等、左岸側に畑井手堰、馬場楠堰等によって取水され、熊本平野を貫流し、有明海に注ぐ。昭和9年6月は雨が降らず、白川流域は大干ばつに襲われた。右岸の津久礼堰が取水し、対岸の左岸馬場楠堰からは水が一滴も流れなくなってしまった。津久礼堰は以前から取水のやり方や堰の形状を巡って白川下流の農民から水を取りすぎ、堰が高すぎるとの指摘をされていた。馬場楠堰側の農民40人は津久礼堰の筏流し口に潜りこみ、川底の石を拾い上げ、水の流れを下流に変えてしまった。その結果津久礼堰へ一滴も流れなくなった。津久礼堰側は村中に非常招集の半鐘を鳴り響かせた。時刻は9月1日の夜明け前、現場では小競り合いが始まった。水喧嘩である。馬場楠堰側はすぐ堰の下の河原を舞台に一斉に津久礼堰側へ向かって、小石を投げ始めた。津久礼堰側も負けてなるものかと小石を飛ばした。頭にあたって、血を流す人、頭を抱えて倒れこむ人が多く出た。警察官も近づけない。熊本北署長らはこれ以上騒ぎを続けば逮捕する、解散しろ。夕闇迫る午後8時におさまった。農民総出の水喧嘩・石合戦は全国的に珍しい。昭和9年当時では、米の収穫がなかったら農民たちにとっては死活の大問題で必死だった。現在では渇水対策委員会が開催され協議されることになるのだが。なお、津久礼堰は細川綱利、馬場楠堰（鼻繰り井手）は加藤清正の築造である。

（古賀邦雄　古賀河川図書館）

◆1000円・新書判・174頁・**熊本日日新聞社**・熊本・202112刊・ISBN9784877556273

『私がヤングケアラーだったころ －統合失調症の母とともに』●林真司著

近年、テレビ等でヤングケアラーという言葉を耳にするようになった。病気の近親者を人知れず世話する若者が決して少なくないという事実に社会が気付き始めたのである。小学校六年生の時から統合失調症を患った母親を世話してきた著者も、そんなヤングケアラーの一人であった。著者の場合のようにその病気が精神疾患であるとき、当事者たちは家族の病気を周囲に知られたくないと、息をひそめるように暮らすことが多いというが著者もまたそうだった。筆舌に尽くしがたい生活の中、逆に学校では明るく振る舞うことが多かったという。本書はそんな著者による「後の世代には決して自分のような経験をさせるわけにはいかない、そのためには、苦痛ではあるが決して目をそらすことなく思い出す限りの事実に、真摯に向き合わなければならない」という思いから生まれた。ところで、その青春時代は落ち着いて眠ることもままならない混乱した生活が多かった著者だが、印象的な出会いをいくつか思い返している。ひとりは落ちこぼれた著者を心配して祖母がつけてくれた家庭教師。学校の勉強ばかりではなく社会問題や映画、読書の話を聞かせてくれた。さらに進学した高校の、妙に老成した若い国語教師。牛乳配達をしながら猛勉強して教員免許を取得したという異例の経歴の持ち主だった。これらの出会いが著者の困難を切り開く力の一部となり、やがて、縁あって京都大学心理教育相談室の山中康裕先生と出会う。この出会いがきっかけとなって少しずつだが、しかし劇的に母親の病状は回復していくことになる。（N）

◆ 1200円・四六判・103頁・**みずのわ出版**・山口・202112刊・ISBN9784864260473

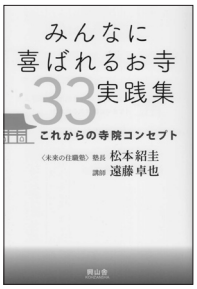
『社長１００人博士化計画』●西村訓弘著

2006年に三重大学大学院でわが国初の地域イノベーション学研究科の創設に関わり、その教壇に立つ著者は、初め神戸製鋼所に入社し、同社生物研究所での研究で博士号を取得、米国企業研究員に転じ、さらにベンチャー企業創業と、自らをイノベーションし続けてきた。コロナ禍で授業形態に大きな変更を余儀なくされるが、オンライン授業への能動的な取り組みで、教員にも学生にとっても新たな教育効果を生むことに気づかされる。旧来のやりかたに風穴を開けたという意味では、コロナ禍で計り知れない打撃を受けている飲食業や観光業なども同じだ。宅配に活路を見出して4千人もの顧客と濃密な関係を結んだ三重県南伊勢町の漁師や、電子商取引に手ごたえを感じる伊勢市のクラフトビール事業者もいる。地方の衰退は著しい。どうしたら元気と富をもたらすことができるのか。地域イノベーションとは、「地域内での創造的破壊を伴う新結合を生み出すことで新たな価値を創造し、時代に適した新しい社会を創造すること」である。社会人が大学院で学び、博士号を持ってベンチャー企業の社長となり、切磋琢磨することで覚醒し、既成概念を打ち破って地域社会を変えていくのだという。

学問の世界にとどまらず、県とタイアップした若手経営者向け経営塾の開設、高校への出張ゼミと、若手リーダーの育成に東奔西走する。優れたビジネス書であるとともに、混迷の時代に生きる道しるべとして、勇気と希望が湧いてくる。（飯澤文夫）

◆ 1200円・四六判・193頁・**月兎舎**・三重・202112刊・ISBN9784907208219

『みんなに喜ばれるお寺３３実践集 －これからの寺院コンセプト』●松本紹圭 / 遠藤卓也著



近年お寺の経営は厳しい時代を迎えています。都市部ではお寺とは関わりを持たない人も増える一方、地方では過疎化や少子化で檀家の減少が続いています。そして新型コロナウイルスの蔓延はさらにそれに追い打ちをかけています。そんな中どのようなお寺が人々から求められているのか、これからからのお寺はどうあるべきかを考えつつ実践している実例を紹介しているのが本書です。

紹介されているお寺は著者らの開く「未来の住職塾」に関わっているお寺になります。そこでは各お寺の事業計画書を参加者が作成し、それに則ったさまざまな取り組みを行なっていきます。お墓のあり方に一石を投じる「レンタル墓」や仏事のあり方などから改革をするお寺があるかと思えば、様々な人に仏教に関心を持ってもらうための場所づくりや広報などに力を入れているお寺もあります。またお寺どうし僧侶どうしの宗派を超えた互助的な組織を作る試みや学習会の開催なども行われています。こうした様々な取り組みは現に課題を抱えたお寺にとって大いに参考になるでしょう。

また今のところお寺とあまり縁のない人にとっても、色々な企画をしているお寺があることを知ることが出来るのはなかなか面白いかもしれません。檀家でもなければ地元のお寺の門をくぐったりするのは、敷居が高く感じるものです。しかし住職たちも実は地元の人たちにお寺を身近に感じてほしいと思っていることも本書からは伝わってきます。（副隊長）

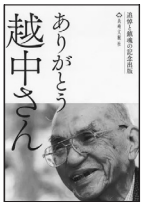
◆ 2300円・四六判・307頁・**興山舎**・東京・202112刊・ISBN9784910408156

売行良好書

期間：2021年12月15日～2022年1月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『ひとり　句集』2000円・深夜叢書社　(2)『特別報道写真集　大谷翔平２０２１　リアル二刀流の軌跡』1300円・岩手日報社　(3)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(4)『象の旅』2000円・書肆侃侃房　(5)『ありがとう越中さん』1200円・長崎文献社　(6)『新版　フジタよ眠れ　絵描きと戦争』2500円・花乱社　(7)『肩書のない人生』2000円・弦書房　(8)『下野猟師伝　聞き書き　猟師たちの物語』1800円・随想舎　(9)『つながる沖縄近現代史』2200円・ボーダーインク　(10)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』800円・リーブル出版　(11)『菜食主義者』2200円・クオン　(12)『現代語訳　上井覚兼日記２』1800円・ヒムカ出版　(13)『自然治癒はハチミツから』2000円・鉱脈社



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『東京かわら版　Ｎｏ．５８２　２０２２年１月号』636円・東京かわら版　(2)『本の雑誌 Ｎｏ．４６４ ２０２２年２月号』700円・本の雑誌社　(3)『おすすめ文庫王国２０２２』800円・本の雑誌社　(4)『昭和プロレスマガジン　５６』909円・昭和プロレス研究室　(5)『フリースタイル　ｖｏｌ．５０』888円・フリースタイル　(6)『音楽』1800円・ナナロク社　(7)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(8)『特別報道写真集 大谷翔平２０２１』1300円・岩手日報社　(9)『天才による凡人のための短歌教室』1200円・ナナロク社　(10)『弔いの月の下にて』1600円・行舟文化

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『越前中世城郭図面集３　越前南部編 補遺編』3000円・桂書房　(2)『現代語訳　上井覚兼日記２』1800円・ヒムカ出版　(3)『新版 高尾山登山詳細図 全１１２コース』900円・吉備人出版　(4)『福澤諭吉と丸山眞男』8000円・北海道大学出版会　(5)『新装版 奥武蔵登山詳細図 全130コース』900円・吉備人出版　(6)『アイヌからみた北海道１５０年』1600円・北海道大学出版会　(7)『鎌倉武士と横浜』1000円・有隣堂　(8)『立山の賦』3000円・桂書房　(9)『大物忌神と鳥海山信仰』1800円・秋田文化出版　(10)『奥武 秩父　峠歩きガイド』1900円・さきたま出版会　(11)『北海道の縄文文化　こころと暮らし』3600円・亜璃西社

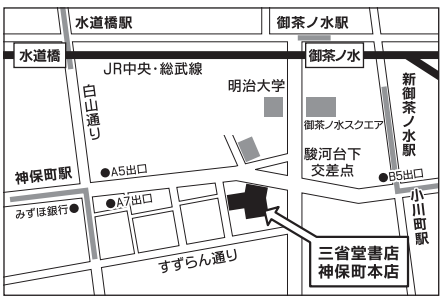
以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼今年、沖縄は〈復帰５０年〉を迎えます。この区切りの年に向けて、気鋭の若手研究者たちがまったく新しい視点で「沖縄の歴史」をつなごうという試みの歴史書を編みました。前田勇樹・古波藏契・秋山道宏編**【つながる沖縄近現代史－沖縄のいまを考えるための十五章と二十のコラム】**本体価格2,200円(ISBN978-4-89982-416-9)です。「気鋭の若手研究者たちが　まったく新しい視点で沖縄の歴史をつなぐ待望の「入門書」が登場。復帰50年を迎える今だからこそ知りたい沖縄近現代の歴史。この本は「教科書」でも、歴史のトリビアを寄せ集めた「歴史ネタ本」でも、専門用語と古文書だらけの「専門書」でもない。世界史や日本史とのつながりを意識し、現代の沖縄社会の課題に向き合う上で必須と思うテーマを選び、最新の研究成果を踏まえ、史料に基づき、時代の流れに沿って配置した沖縄近現代史の「入門書」である。執筆者は本章とコラム併せて、総勢25名。多彩なバックグラウンドを持つ研究者たちが、知恵や知識を出し合って、沖縄に興味をもつ幅広い読者へむけてまとめた」（ボーダーインクのホームページ紹介文より）。以下目次より抜粋いたします。

▽

第一章　ペリーが琉球にやってきた時代／第二章「琉球処分」の一四〇年／第三章　甘いけど苦い、黒糖と沖縄近代／第四章　沖縄を変えたふたつの戦争／第五章　沖縄の人々にとって「日本人」になるってどういうこと？／第六章「ヤマト化」に翻弄される沖縄／第七章　エスニック・マイノリティの沖縄戦／第八章　読谷・旧軍飛行場用地問題から何を学ぶか／第九章　語りなおされる沖縄戦体験／第十章　アメリカ膨張史のなかの沖縄／第十一章　何が人々を「島ぐるみ闘争」へと駆り立てたのか／第十二章　復帰運動を「総括」する／第十三章　ウチナーンチュの世界帝国／第十五章　くりかえす沖縄ブームと基地問題

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店
BOOKS SANSEIDO
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。